

医者も知らない平穩死



連載②⑤

△長尾和宏△長尾クリニック
院長。日本尊厳死協会副理事
長。著書に『平穩死』10の
条件』など。

70代のMさんは、元料理人。神経難病の一種であるオリブ橋小脳萎縮症を発症した奥さまを、自宅ですべて見えています。

寝たきりで、食事もトイレも自分でできない奥さまの介護は非常に大変だと思つたのですが、その介護ぶりは、担当の訪問看護師が「パーフェクト」と言うほど素晴らしい。

家事も完璧で、室内はいつも清潔。物が散らかっているところを見



(写真はイメージ)

時々、胃ろう

たことがありません。奥さまは数年前に食べられなくなり、その時、胃ろうを作りました。胃ろうは、胃と体表面が通じた「ろう孔」のことで、口から食べられなくなった人

に、チューブを通して水分や栄養分を注入する方法です。一般的に、マイナスイメージで捉えられがちな胃ろうですが、Mさんは胃ろうを上手に利用しているんです。

つまり、奥さまの全ての食事を胃ろうに頼り、口から食べられる酒を、奥さまはワイン分は口から食べさせ、それが難しい時だけ胃ろうを使う。私もご相伴にあずかっていたことがあるのですが、Mさんが作る料理は、本当においしいんです。なんせ、プロです。だから、料理人として勤めていた店はもう閉めていたので、今作るだけ。丹精込めて作

つた料理を、奥さまの口元にゆつくり運ぶ。そういう時、奥さまはとても幸せそうな表情をなさいます。

ご夫婦ともにお酒が好きで、Mさんは発泡酒を、奥さまはワインを飲まれるそうです。「おかあちゃんが飲む用い、いつも冷蔵庫に入れてるんですわ」

とワインの小瓶を見せながら、「おかあちゃん、今日の昼は何にしよかあ」と話しかけています。奥さまは、愛されているなあ、心から感じました。